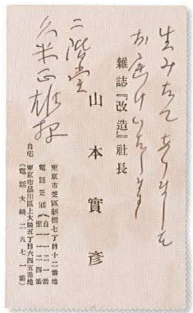


II 「現代日本文学巡礼」

久米正雄が監督を務めたこのフィルムは、改造社の社員水島治男が社長である山本実彦の紹介で、各作家を訪ね歩くという構成となっている。映像は「現代日本文学巡礼」というタイトルに続き、水島が山本を訪ねるところから始まる。

多数の作家がフィルムに収められているが、一方で、正宗白鳥・島崎藤村・田山花袋・巖谷小波等には出演を断られたという。特に白鳥は「死んでから生きて動くのはやだ」と言っており断ったという。

久米は後年、自身の著作「二階堂放話」の中で、撮影された文士達について回想している。



名刺「雑誌『改造』社長 山本実彦」

久米正雄

一八九二(明治二十四)〜一九五二(昭和二十七年)

父・由太郎は福島県の近代教育の基礎を作った後、長野県へ転出した。母・幸子は安積開拓に尽力した立岩一郎の娘である。父の自殺で母方の実家である郡山に移住する。一九〇五(明治三十八)年、安積中学校(現・安積高校)に入学し、三汀の俳号を用い俳句に親しんだ。一九二二(大正二年)に東京帝国大学(現・東京大学)に入学し、一九一六(大正五年)に芥川龍之介、菊池寛らとともに第四次「新思潮」を創刊する。

芥川とともに夏目漱石の門下となるが、漱石没後に令嬢・筆子に恋をするものの、夏目家出入り禁止となる。この体験にもつじた「密書」「破船」を書き、流行作家となった。

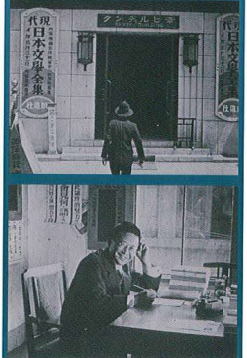
撮影当時の久米は漱石令嬢との失恋から立ち直り、艶子夫人との結婚生活、息子の誕生を待つばかりと順風満帆な時期であった。

監督自身の映像ということもあり、フィルム中、最も収録時間が長い。対話形式で筋立した内容や多方向からのカット割りなど、自画自賛の言を差し引いても、撮影機を所有していただけあって、凝った映像になっている。

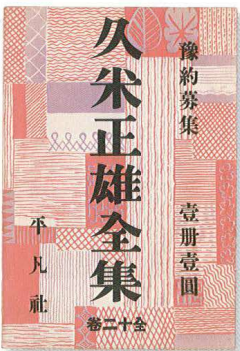
現代日本文学巡礼

昭和二年五月
改造社

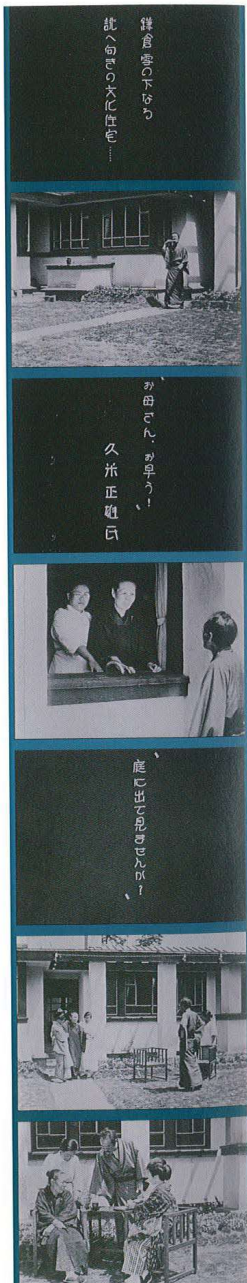
監督 久米正雄
撮影 内田宗一
助手 水村賢登



撮影の内田宗一は久米正雄原作『地蔵教由來』(昭和2年、ナショナルキネマ社)を撮っている



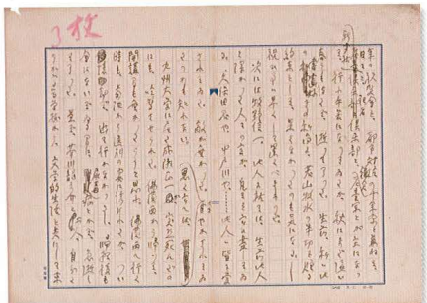
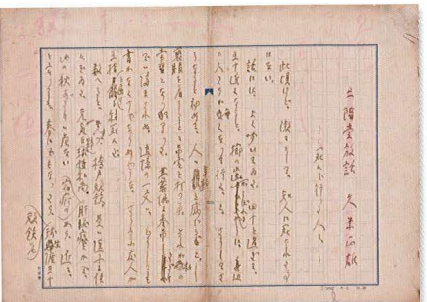
『久米正雄全集』豫約募集
1930(昭和5)年 平凡社
(山岸郁子氏所蔵)



鎌倉雪の下で
読入句の文化性也……

お母さん、お早う！
久米正雄氏

庭に出てお母さん！



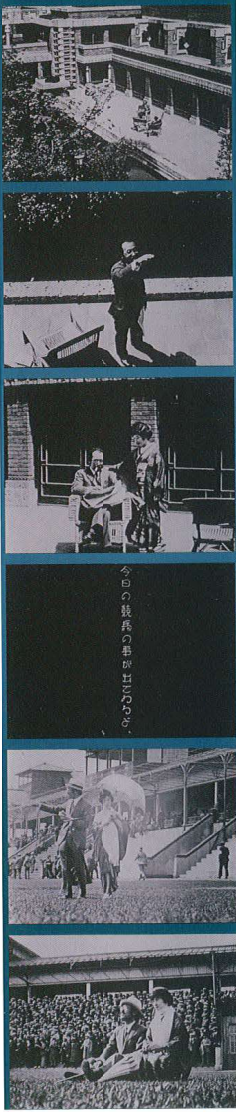
久米正雄 原稿「二階堂放話—死んで行った人々—」

最後に自分を。——此の頃、私たちは鎌倉は雪の下、嘗つては九條武子さんも鳥渡住んでみた云ふ、ライト式のパンガロウを借りて住んでみた。中風で半身不随だったが、母もまだ生きてゐた。其代り、子供はまだ、妻の羽織の袖の下に、ひそかに蔽ひ隠されてゐた。数へて見ると、それからもう七年、妻の腹中に居る子供は、明けて八歳。…その間に私は何をして居たらう？ 只べんぐと四十代に歩み入つて、そして世の悲しき道化役者であつたに過ぎなかつたは……

久米正雄「あの頃」『二階堂放話』より

文藝別冊

久米正雄氏 上巻
寄贈ホテルに収め



今日の結婚の手配はどの。

芥川龍之介

一八九二(明治二十五)〜一九二七(昭和二年)

東京帝国大学在学中に、久米正雄・菊池寛らと第四次「新思潮」を創刊する。創刊号に掲載した「鼻」が夏目漱石に激賞される。その後「羅生門」「地獄変」などの名作を発表し、作家としての地位を確立する。久米・菊池らとともに大正文学を牽引する存在となつてゆく。「蜘蛛の糸」や「杜子春」といった童話も残している。

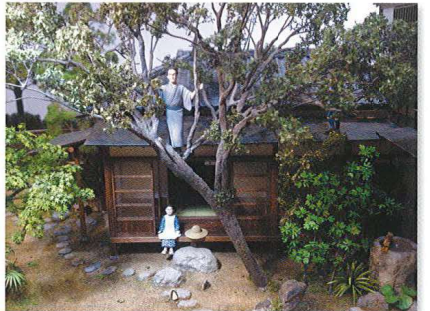
芥川の文学に対する姿勢は、菊池に「芸術至上主義」とも評され、久米・菊池とは異なる独自の道を歩んでいた。

「唯ぼんやりした不安」という言葉を残し、致死量の睡眠薬を飲み三十五歳の若さでこの世を去る。芥川の死は、文壇だけでなく当時の社会にも大きな衝撃を与えた。

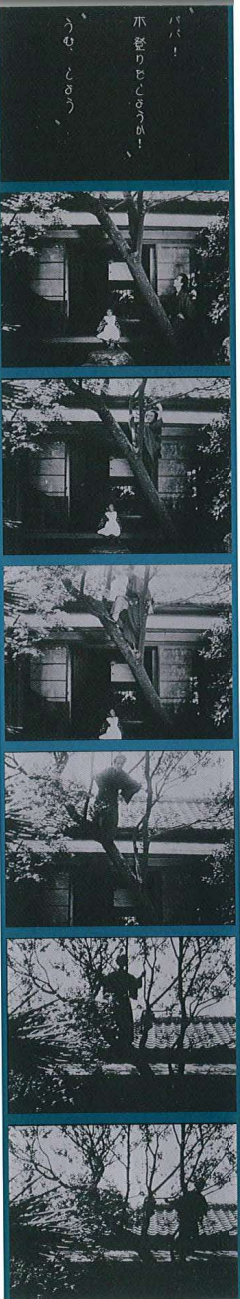
奇しくも生前最後の芥川の姿を撮影したものに、二ヶ月後に自殺する人物とは思えない。だが一種の心境の裏返しとも取れ、改めて見ると、木に登つた際の逆光で黒一色の芥川の姿には、不吉な予兆すら感じられるものとなつてゐる。



芥川龍之介
「田端の家」復元模型(縮尺30分の1)
(写真提供:田端文土村記念館)
外観はもとより、内部も精巧に復元された模型。
模型の製作にあたっては、フィルムも大きな役割
を果たしている

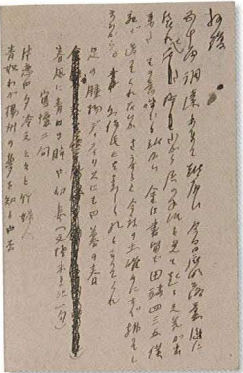
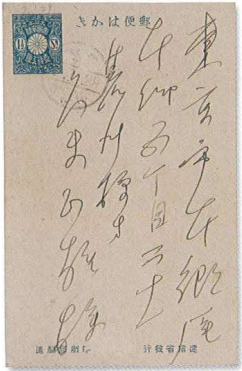


宿衛控所口処りの口口
度口委口口口口口口
編口口口口口口口



自殺した年の、自殺の三ヶ月前。――撮影をなすと云つたら、何か愚圖つきさうな高踏龍之介が、ひとく人暮しげで機嫌がよかつた外に藝は無いから、木登りでもしてやらうか。今にして思へば、それも現世に絶望した人の、悲しい苦笑に満ちた言葉だとは、誰が知らう。私は此の画面に、サブタイトルして、曰く、河童の木登り。又、樹上の基督……此畫は、死後追悼の日に、上映して見て、皆が怒然とし、殊然としたものだ。――下でキョトンと樹上の父を見ている三男君も、もう大分大きくなつたらう……

久米正雄「あの頃」二階堂放話より



芥川龍之介 久米正雄宛書簡

1918(大正7)年1月29日
金の調達の札と送付先の指示などが書かれ、匂が添えられている。消印日付から「今度の土曜日」とは2月2日(土)を指すと思われ、当日は芥川と原文の結婚式が田端で行われている。さらに金の送付先が田端であることから、調達した金は結婚式費用、あるいは新婚生活を始めるのに必要な費用の可能性が高い

【新資料紹介 久米正雄 原稿「母」】

これは第四次「新思潮」第一年第六号に掲載されたもので、昨年当館に新たに収蔵された資料である。

原稿用紙の中央上に99、103の番号が付されており、冒頭部分が含まれていないものの、内容と筆跡から久米正雄の「母」の原稿であることが分かる。これらの原稿には久米の筆跡とは異なる赤のインクによる数多くの書き込みが見られる。

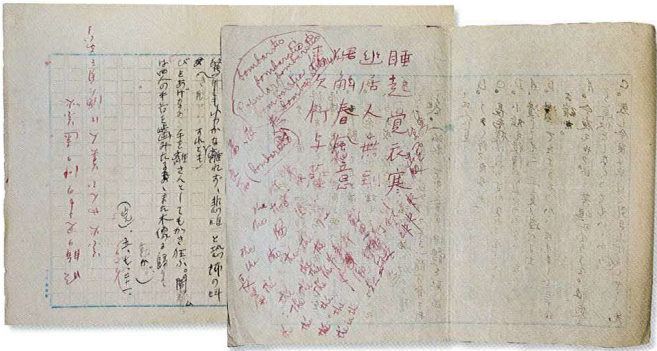
第四次「新思潮」は第一高等學校以来の友人であった久米 芥川龍之介、菊池寛、松岡譲、成瀬正一が一九一六(大正五年)に創刊した同人誌で、夏目漱石に認めてもらうことを第一の目的として創刊された。

同号は、松岡譲「同情」、菊池寛「間魔堂」「久米正雄」「母」、芥川龍之介「仙人」、菊池寛「上田敏先生の事」という順で収録されている。「母」の前の「間魔堂」の原稿は菊池寛記念館が所蔵しており、原稿の表裏面には芥川が赤いインクで記した漢詩や俳句が残されている(文藝もす二三・三三)。また、「母」の次に掲載されている芥川の原稿「仙人」については庄司達也氏の報告がある(芥川龍之介研究年誌「第二号」)。それによると、「仙人」の原稿の冒頭にある赤のインクによる書き込みの多くは芥川の筆と考えられること。つまり久米の原稿「母」の前後の原稿にはいずれも芥川の手による赤のインクによる多数の書き込みがなされている。そのため、久米の筆跡とは異なる「母」の書き込みも、芥川のものである可能性が高い。

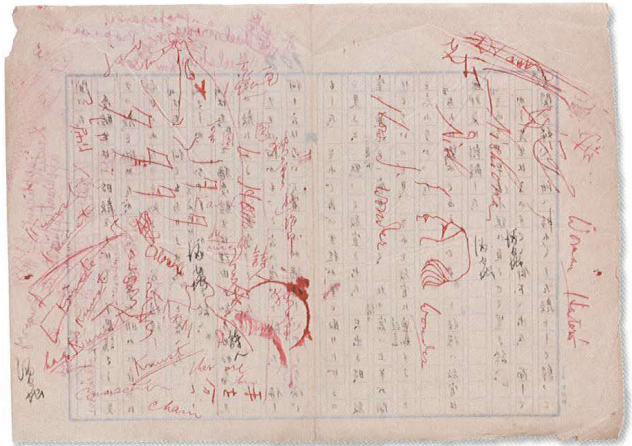
芥川の研究者で、「新思潮」の原稿を数多く調査している庄司氏に原稿を見せいただいたところ、全ての書き込みが芥川の手によるものか判断がつかないものの、芥川のものと思われる書き込みが多数認められる。同人誌製作当時の雰囲気や伝えるものとして、とても興味深い資料であることをご教示を得た。



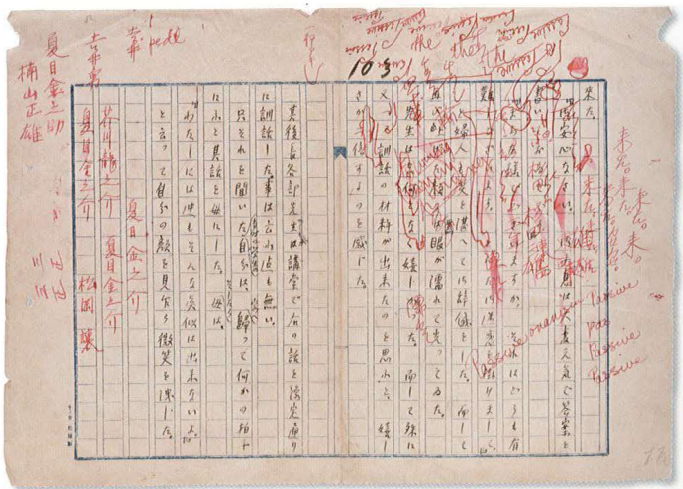
『新思潮』第1年第6号 新思潮社
1916(大正5)年8月1日



菊池寛 原稿「間魔堂」(写真提供:菊池寛記念館)
左:芥川の俳句が書き込まれた原稿表面 右:芥川の漢詩が書き込まれた原稿裏面



102(裏)



102(表)

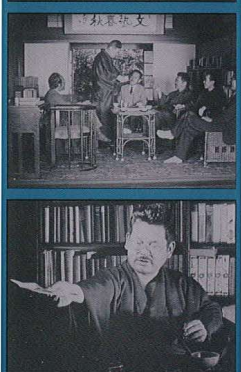
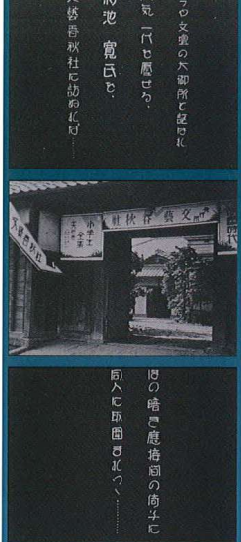


菊池寛

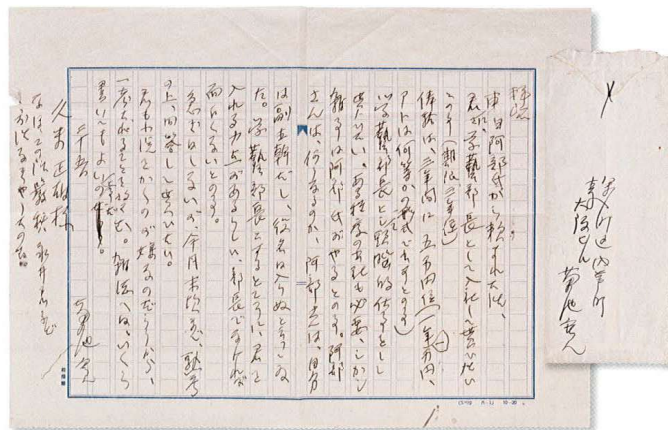
一八八八(明治二十二)〜一九四八(昭和二十三年)

香川県の高松中学校を卒業後に入学した東京高等師範学校を除籍、明治大学や早稲田大学に在学した後、第一高等学校へ入学する。第三次、第四次「新思潮」発刊の際には久米・芥川らと共に同人となり「屋上の狂人」「父帰る」など多くの戯曲を発表した。時事新報社の社会部記者時代に「無名作家の日記」「恩讐の彼方」などを発表し、文壇での地位を確立することとなる。

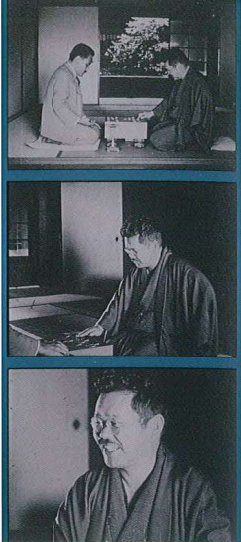
文壇・文学者の地位の向上と保護にも尽力する。文藝春秋社を設立し、「文藝春秋」を創刊。亡及や自身の名を採った「芥川龍之介賞」「直木三十五賞」「菊池寛賞」を設立した。



『菊池寛全集』豫約募集
1929(昭和4)年 平凡社
(山岸郁子氏所蔵)



菊池寛 久米正雄宛書簡 1936(昭和11)年8月25日
菊池が久米に、「東京日日新聞」の学芸部長として入社を要請する内容



其頃文藝春秋社は、まだ會社では無かつた。麴町番町の、有島武郎さんの連宅を借りて、菊池寛は大家族主義の如き一家を持つてゐた。その廣間で、皆は集つてはよく談じ、よく將基をさし、よく編輯してゐた。客の絶え間は無かつた。——此の場面の、威權將基の對手は、誰だか忘れてしまつたが、其頃小學生全集をやつてゐた、啓成社の誰かでは無からうか？見てゐるのは、どうも新派俳優の伊志井寛君らしい。伊志井君は其頃、菊池の後援の下にあつた、新劇協會の俳優で、まだ眞實の役者では無かつたのだ。

久米正雄「あの頃」二階堂放話より



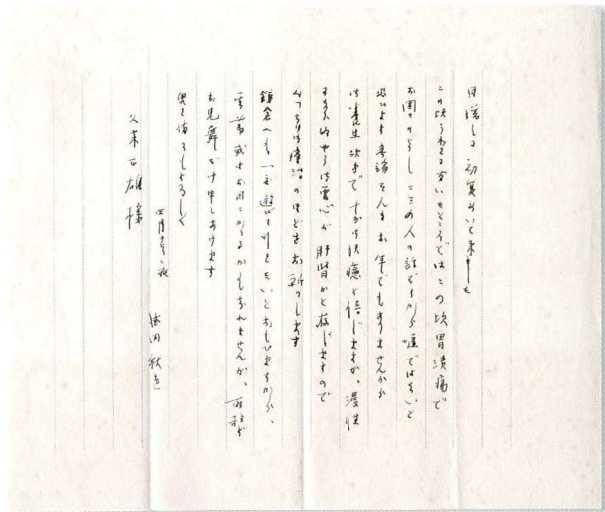
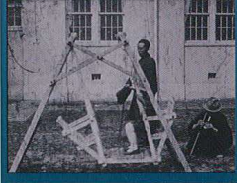
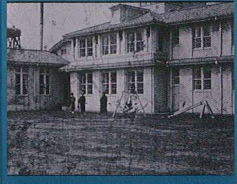
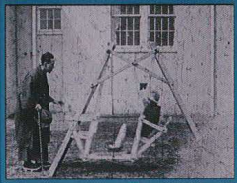
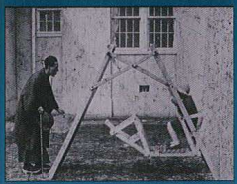
大阪の講演旅行で 1920(大正9)年11月
後列左より芥川龍之介・宇野浩二・久米正雄・佐佐木茂索・直木三十五、前列左より菊池寛・加納作次郎・田中純



麻雀牌
麻雀連盟の初代会長が菊池で、二代目が久米



麻雀を楽しむ久米正雄と菊池寛

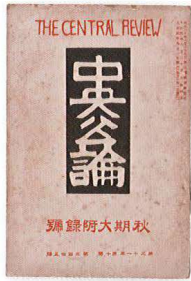
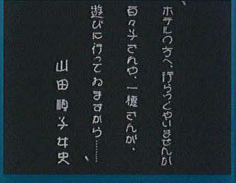
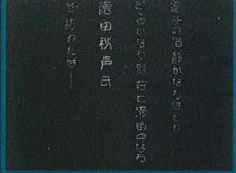


徳田秋聲 久米正雄宛書簡
1938(昭和13)年4月17日



箱根にて 1920(大正9)年
前列右より久米正雄、1人おいて徳田秋聲。
後列右より谷崎潤一郎、1人おいて里見弴、
1人おいて近松秋江

松竹撮影所にて 1924(大正13)年
左から久米正雄・徳田秋聲・池田義信。「女優
山田順子紹介に行きし時」と裏書がある



『中央公論』第31年第10号
1916(大正5)年 中央公論社
徳田秋聲「犠牲者」掲載



徳田秋聲 短冊

春雨の草履ぬらしぬ芝居茶屋

徳田さんは、其頃、逗子のホテルの前にさゝやかな別宅を持つてゐて、「この枝」に歸つた小鳥と、小春日の如き日影を、楽しんで居られたが、此の和毛奴しき小鳥は、飛び去つて再び歸らなかつた。——此の畫面は、今又、煙し銀の心境の中に、再び澄み入つた先生を、恐らく苦笑せしむるものだらう。私もそれを恐れる。が、併し、愛慾の苦難を、過去つて、眞に市井苦勞の達人なる先生にあつては、或ひは初冬の日影を過ぎる、一靈驛で、もあらうか……

久米正雄「あの頃」『二階堂放話』より

徳田秋聲

一八七二(明治四)〜一九四三(昭和十八)年

父が脳溢血で死去し、第四高等中學校を中退。作家を志し、二十二歳で尾崎紅葉の門をたいたが、入門は叶わなかつた。その後、金沢へ帰郷し、自由党機關紙「北陸自由新聞」の編集を行い、長岡では新聞記者となる。「秋聲」という筆名を使い出したのもこの頃である。一八九五(明治二十八年)に二度目の上京、尾崎紅葉を再び訪ね、門下生となることを許された。後に、自然主義文學者として活躍。代表作に「撒」・「あぐれ」などがある。

徳田と久米との親交は古く、一九二〇(大正九)年に、秋聲と田山花袋の生誕五十周年の祝賀会の際には、久米が司会を務めている。

映像には、妻の急逝の後、親しくなつた年下の山田順子との生活の様子が収められている。当時、発表された作品にもその影響が色濃く表れ、別離後、数年経た後に発表された「仮装人物」に結実した。

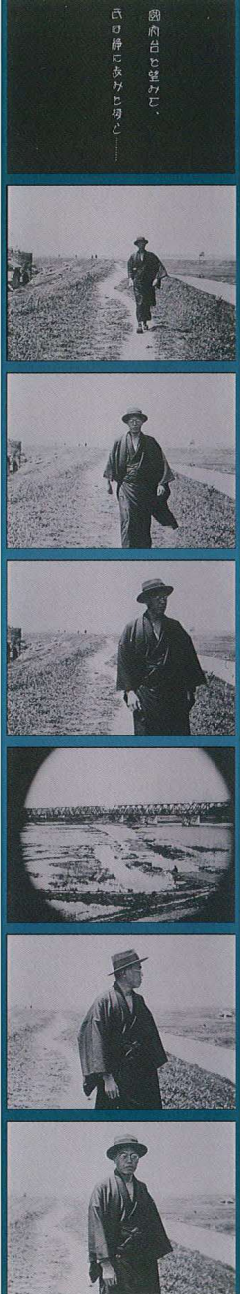
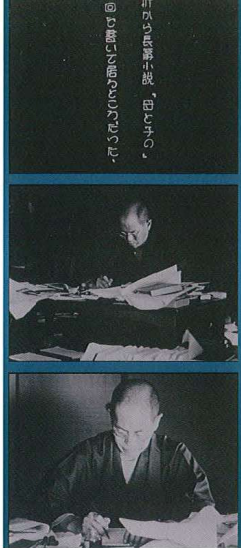
武者小路実篤

一八八五(明治十八)〜一九七六(昭和五十)年

一九一〇(明治四一)年に友人であった志賀直哉らと共に雑誌「白樺」を創刊。以後六十年にわたり文学活動を行う。小説では「お自出たき人」、戯曲では「その妹」などが代表作として知られるが、画家としても活躍した。

映像是、新しき村(宮崎)を出て一年強の間に奈良から和歌山へと、引越しを繰り返して、ようやく東京に落ち着いた当時のものである。手を散策し、鉄橋を走る列車に視線を移す様子をカヌーアングルで表している。

なお改造社が創刊した「現代日本文学全集」にはじまる本ブームが起きた際、その印税で実篤は「未嘗写のお金持ち」となったという。そして、その印税は主に新しき村の活動に注がれることとなる。

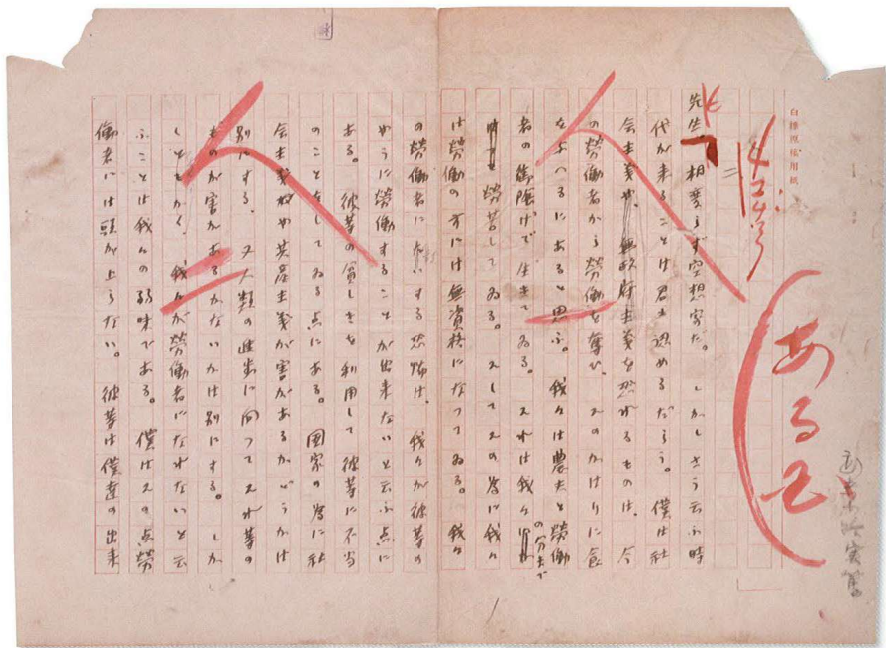


『白樺』の人達の中で、好きな人は澤山あるけれども、人間として誰が一番興味があるかと云はれれば、自分は矢張り武者小路氏だと答へる。此の人は何と云つても白樺派の代表的人物である。『白樺的』など、云ふ言葉は、此人あつて初めて出来たやうな気がする。其の意味で此人の『白樺的』な餘りに『白樺的』な所が、一部の人を強く引きつけると共に、又一部の人にひどく反感を持たれるのだらう。武者小路氏は敵も多いが味方も多いに違ひない。自分なぞも人間として一番好きになれるのは或ひは此人ではなからうかと今だに思つてゐる。

久米正雄「白樺を代表する武者小路氏」
『久米正雄全集』第十三巻より

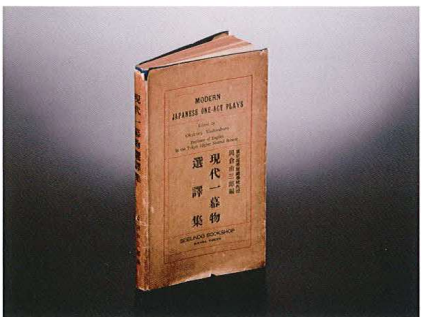
今度の新らしき村の計畫なども、自分が堪らなくなつてした事ではなくて、矢つ張り氏の一種の趣味から生じた如く思はれる。併しづれにもせよ、あゝ云ふ事を敢行出来るのは、吾が武者小路氏あるのみである。大正のヨハネ、大正のヴァインナ、大正の透合たる氏の健在は、やがて後に来る者の偉大さを豫約する點だけでも、祝福するに足るものである。新しき村の誕生は、やがて眞の『新らしき郷』の出現を豫約せぬでもない。

久米正雄「白樺を代表する武者小路氏」
『久米正雄全集』第十三巻より



武者小路実篤 原稿「ある国」

「ある国」は、『大阪毎日新聞』夕刊に1918(大正7)年7月12日〜21日全9回にわたり連載された。『新しき村の生活』に収録される際、『新しき村に就ての対話 第一の対話』と改題されている。これは「白樺原稿用紙」に書かれており、第2回目に掲載されたものである。原稿には書き直された部分や打消された部分も見られ、推敲の跡が顕著にみられる。



『現代一幕物選譯集』
1923(大正12)年 誠文堂
久米正雄「地蔵教由来」、菊池寛「奇蹟」、武者小路実篤「ある日の一休」



『心』第21巻第3号ほか
1968(昭和43)年 平凡社
武者小路実篤 編集・発行

佐藤春夫

一八九二(明治二十五)〜一九六四(昭和三十九)年

和歌山県新宮町で医師の長男として生まれた。一九一〇(明治四十三年)に中学卒業後、上京し生田長江に師事する。また、与謝野鉄幹の新詩社に入り、堀口大樹と親交を結ぶ。慶應義塾大学文学部予科に入学し、当時教授だった永井荷風に学んだ。一九一八(大正七年)に、谷崎潤一郎の勧めで「李太白」を『中央公論』に発表、詩と小説の両分野に才華を發揮していく。代表作に『殉情詩集』『田園の憂鬱』などがある。

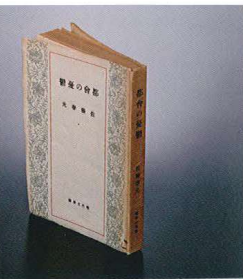
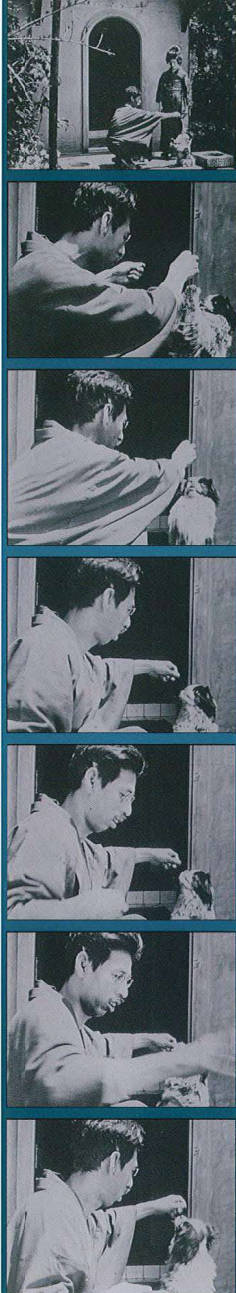
久米が死去した際、佐藤は追悼文を寄せている。それによると、二人の親交は大学時代に始まっていたようで、久米の下宿を訪れた時の様子も描かれている。「現代日本文学巡礼」を撮影した年に建てた新居のことを字幕で「西班牙犬の家」と称しているがこれは同名の出世作にかけている。撮影の際に仲睦まじい様子を見せるタミ夫人と離縁し、長年思慕していた谷崎潤一郎夫人千代と再婚するのは、この三年後のことである。



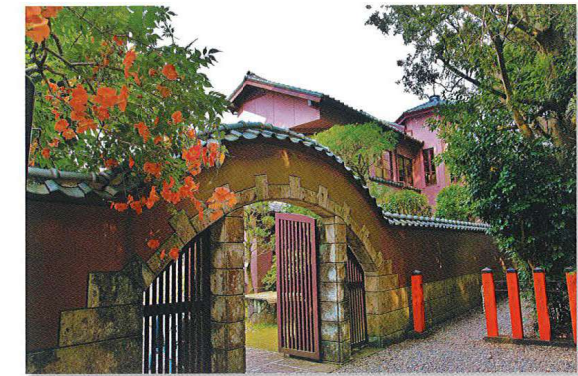
有馬温泉にて 1941(昭和16)年頃、中国地方講演旅行
右から2番目久米正雄と3番目佐藤春夫



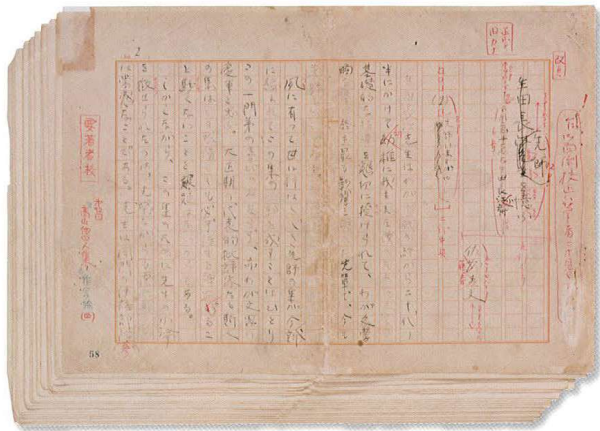
佐藤春夫記念館(写真提供:新宮市立佐藤春夫記念館)



佐藤春夫『都会の憂鬱』
1947(昭和22)年 鎌倉文庫



佐藤春夫記念館(写真提供:新宮市立佐藤春夫記念館)



佐藤春夫 原稿「先師を憶ふ」

何でも最初に彼に會つたのは大学の正門を出て来る制服姿の彼とその前の通で行き會つたのであつたと思ふ。(略)
久米正雄の名はその時より二三年も早く三汀の俳號とともによく知つてゐた。或は土曜劇場上演の牛乳屋の兄弟も、その時はもう見てゐた筈である。さうして劇場の廊下では三田の仲間の誰やらが教へて當日の舞臺の作者久米正雄をよそながらに見てゐた。その時も同じく大学の制服姿であつたやうな気がする。先方でも詩人として僕の名は知つてゐたとか、大學正門前の紹介者がその時、久米と別れてからの話であつた。もとより行きずりの立話に「やあ」「さよなら」の交換で何の話もなかつたがこの時からの知り人には相違ない。

久米はそれより前、多分高等學校時代であつたらうか、萬朝報が催した暑中休暇の學生徒歩水郷めぐり(?)だつたかの選手に選ばれて名文の紀行によつて文名を轟はれてゐた。尤もその名紀行文を僕は終に讀まずじまひで、ただ噂に聞いたばかりであつたが、その噂を傳へた先生生田長江先生の例によつて若い者に對する好意に満ちた批評によれば久米の紀行文は簡潔で新鮮な自然描寫など、どうしてただ學生の名文といふ程度ではなく、唯の風のものではないといふのであつた。

(略)

その頃我々はよく人の口眞似をしてふざけたものだが、久米の眞似をする時には、
「やあ、恐縮だなアとちよつとうつむいて後頭部を掻くやうな手つきをする事であつた。

酔つて酋長の娘を樂しげに踊る人も居なくなつた。さう思へば、一昨年の秋それを踊つた時から、いつもの元氣はなかつた。あれが久米との別れであつた。

佐藤春夫 若き日の久米正雄『文藝春秋』第三十卷第七号より



徳富蘇峰

一八六三(文久三)〜一九五七(昭和三十三年)

新聞記者・歴史家。蘆花は弟。民友社を設立した後、「国民新聞」を発行する。代表作に「吉田松陰」や「近世日本国民史」などがある。撮影時の年齢は六十四歳で、同年、長らく通信が途絶えていた蘆花と再会するものの死別する。

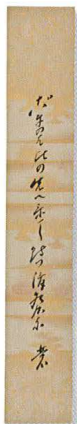
蘇峰は、この後三十年近く長寿を重ね、その執筆風景が映像に収められている。「近世日本国民史」は、一九五〇(昭和二十七年)に一〇〇巻で完結した。



徳富猪一郎(蘇峰)『近世日本国民史』
1934(昭和9年) 明治書院



小山内薫
短冊



小山内薫

一八八一(明治十四)〜一九二八(昭和三年)

劇作家・演出家。築地小劇場を創設し、演劇活動に尽力する。一方で、小説や詩の分野でも才能を発揮する。映像は、築地小劇場が浅草松竹座で行った「ゴリキのどん底」の舞台裏を収めたものである。小山内自身が演出したのが、カメラアングルや台詞字幕も凝った内容になっている。この撮影の翌年に四十七歳で急逝した。

其時、小山内さんは、築地小劇場の一黨を引連れて、浅草の松竹座で、小山内十八番の「どん底」を演じ出されて居られた。あらいスコッチ縞の、一種の築地帽とも云ふべきものを被つて氏の顔は、若々しかった。此の大寫字が女優部屋に来て、女優たちのメイク・アップを、指圖して居るところ。向うに肩掛を掛けてゐるのが、たしか當時、ナターシャに扮した山本安英さん。――薊の路の新劇道、山本さんの頼しい類も、其頃の方が、まだしもよくかだつたと見るは僻目か。お。...

久米正雄「あの頃」二階堂放話より



広津柳浪

一八六一(文久五)〜一九一八(昭和三年)

博文館に入り尾崎紅葉を知ると、文学結社・硯友社の同人となり「残菊」で作家としての地位を固める。「黒蜥蜴」など貧困層等を主題にした作品が多く、深刻小説「悲惨小説」と呼ばれ、当時の文壇で注目を集めた。

晩年は文壇との交渉を断ち、寂しく孤独であったといつ。柳浪が収録された「現代日本文学全集」第七編が発行されたのは、その死後であった。



広津和郎
原稿「父の死」

大森の望翠樓ホテルの背ろの、だから坂を下りて、又登つたところに、閑寂な住居があつた。小ぢんまりした平屋建ての、離室としても云ひさうな。――それが明治の文豪、今戸心中、河内屋の作者の、隠居所にしては、物質的にはどうでも、しんとした老匠の心遣ひが、つましい家具の末迄行き渡つてゐて、撮つてゐても、ほんとに氣持がよかつた。柳浪先生は、大きな其の本を對手に、パチリ〜と一人で石を下ろされてゐたがその石の音が、今でも、私の耳の底にある。：樹を洩れる初夏の目が、含んだ孝子の額にちぢつたの。...

久米正雄「あの頃」二階堂放話より

広津和郎

一八九一(明治二十四)〜一九六八(昭和四十三年)

小説家・評論家。柳浪の次男。代表作に「神経病時代」がある。映像には、隠居した父・柳浪を訪ねる様子が取められている。

文学全集刊行時に父・柳浪の「人間は自惚れが強く、傲慢であるほうがよい。俺にはその両方が足りなかつた」との言葉を回想し、自らの巻の冒頭に「作家は自惚れが強い方がいい。長い間自惚れを持続したら、それだけでも大仕事だ」との言葉を寄せている。





新井の肖像
岡本綺堂氏
超時を断つてきて

かひら新井氏
新井の肖像
新井の肖像



岡本綺堂

一八七七(明治五)〜一九三九(昭和十四)年

劇作家・小説家。新時代劇作家として活躍した。代表作に「修禪寺物語」「平七捕物帳」などがある。

撮影は、関東大震災で焼失し、一九二六(大正十五)年に建て直した新居で行われた。瀟洒な造りの一端が映されている。

撮影時、岡本は五十五歳であったが、創作意欲は盛んで、歌舞伎座への新作の執筆風景が記録されている。



藤森成吉の肖像
藤森成吉の肖像



藤森成吉

一八九二(明治二十五)〜一九七七(昭和五十二)年

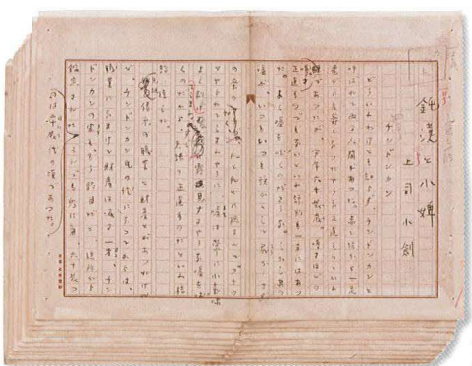
劇作家・小説家。家は薬種問屋で使用人や小作人に対する心情が後の作品に影響を与えたとされる。社会主義運動の影響を受け「深茂左衛門」などの戯曲を多く発表した。

撮影した年は、一九二六(大正十五)年に発表した戯曲「何が彼女をそぞさせたか」が好評を得て、社会主義運動の旗手として活躍していた時期である。青服を着て労働する映像は、当時の藤森のイメージをよく表したものである。

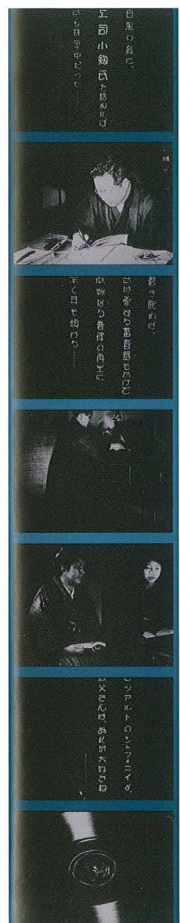


卯の花の咲きて乱れて物おもふ

藤森成吉 短冊



上司小剣
原稿『鈍漢と小婢』

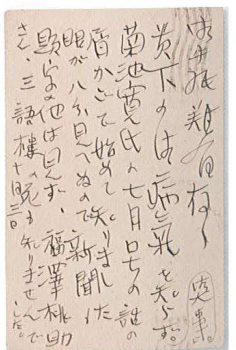


上司小剣

一八七四(明治七)〜一九四七(昭和二十二年)

新聞記者から作家に転じ、體の皮で文壇に認められる。代表作に「木像」などがある。

上司はレコードの取集家としても著名だった。そのためか、蓄音機でレコードを聞く場面が撮影されている。共に出演した夫人と姪の台詞(字幕から、モーツアルトの交響曲を愛好していたことがわかる)。



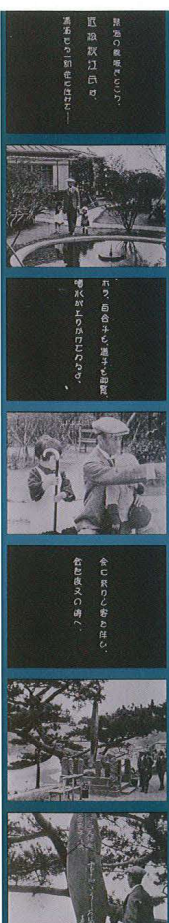
近松秋江 久米正雄宛書簡
1938(昭和13)年7月3日

近松秋江

一八七六(明治九)〜一九四四(昭和十九)年

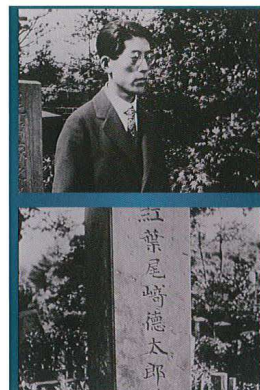
当初、徳富蘇峰らに惹かれるが、しだいに尾崎紅葉、泉鏡花らの作品に傾倒するようになる。男女の愛欲を描く作品が多く、代表作に「別れたる妻に送る手紙」「黒髪」などがある。

映像には、娘たちとの様子が収められている。また近松が傾倒していた尾崎の「金色夜叉」の碑を訪ねる映像がある。

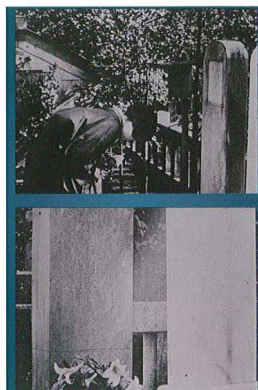


墓参

フィルム後半部は、撮影時に既に他界している文人達を墓参するという形で紹介するもので、思ひ起す。明治大正世界の巨匠。今は亡き人、既に十指に余ると……という解説から始まる。尾崎紅葉や国木田独歩は、遺子に出演してもらい、その他は、久米や改造社関係者が訪れている。中でも夏目漱石の墓に久米が訪れるシーンは、久米の作品「墓参」の中の、夜、密かに漱石の命日に墓前に参る場面を思い起こさせる映像になっている。



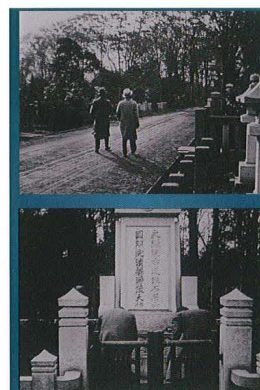
尾崎紅葉
1867(慶応3)～1903(明治36)年



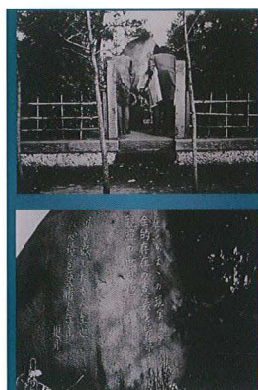
有島武郎
1878(明治11)～1923(大正12)年



国木田独歩
1871(明治4)～1908(明治41)年



夏目漱石
1867(慶応3)～1916(大正5)年



島村抱月
1871(明治4)～1918(大正7)年

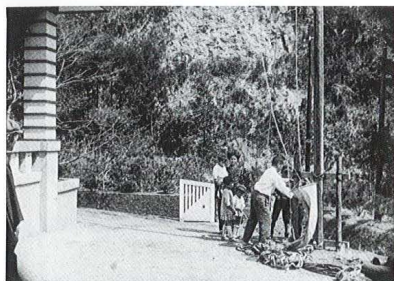
里見淳

一八八八(明治二十二)～一九八三(昭和五十八)年

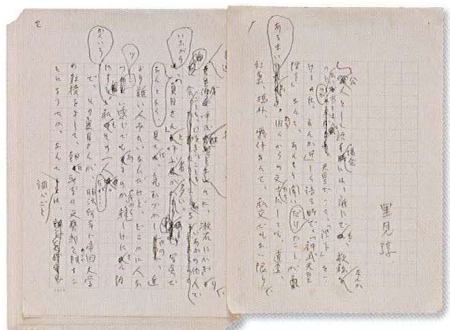
本名、山内英夫。有島家の四男として生まれる。出生直後に山内家の養子となるが、有島家で育てられた。長兄に武郎、次兄に生馬がいる。生馬やその友人である志賀直哉の強い影響を受け、「白樺」に同人として参加。一九一九(大正八)年には吉井勇、久米正雄らと「人間」を創刊。代表作に「安城家の兄弟」がある。

里見は、『現代日本文学全集』の講演会に芥川と北海道方面を訪れている。久米の『二階堂放話』によれば撮影された際の様子が記述されており、これが『現代日本文学巡礼』に収められた映像と思われる。フィルムとしては確認できないことから、接着してしまい、後の映像にできなかったものと考えられる。

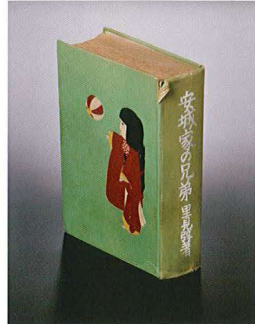
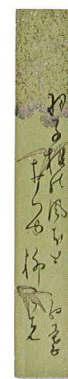
また、久米家所蔵のステール写真には、里見が鯉のぼりを掲げている写真が残る。この写真も本来は映像として撮影されたものと思われる。



里見邸にて
里見と久米は家族ぐるみの付き合いを続けた



里見淳 原稿「(無題)」



里見淳『安城家の兄弟』
1931(昭和6)年 中央公論社



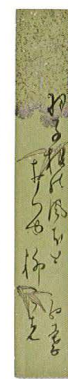
(『二階堂放話』より転載)

ありといはば
君はなみだに宿るらむ
きみを思へば涙ながるる



有島武郎
短冊

羽子板の風ほど打つや柳こえ



尾崎紅葉
短冊

大正の終りだったらか、昭和の初だったらか、一世は文壇、まだや、華かで、改造社の国木全集、燦然と輝き出でた時、私は同社の委託を受け、道楽半分に、一つはその宣傳用に供せんため、當時の目ぼしい文士諸氏を歴巡して、その生活を映畫に収めた、畫は、實寫映畫としては私の監督だけに、なかく傑作で、京都で映寫した時なぞは、其道の巨匠、衣裳貞之、助君をすら、感心せしめた。それに記録映畫として、既に「國寶」の域に入ったシーンも、一二には止らない。

久米正雄、あの頃「二階堂放話」より

「おい、洋！」

里見さんは、鎌倉西御門に建てたばかりの洋館の、二階のヴェランダから、下の御子息さんと呼びかけてある。二男のエツ男さん、お嬢さんのルリちゃんも、まだ、まるで子供だ。此のお子さんが、それぞれ中學校と、女學校へ行つて、そして里見さんの頭の髪は、かうツツブリ黒くは無い。――が、微笑ましい家庭風景「佛心」の一断面……之でどうして「無法人」であり、常習賭博者なのだらうか？

久米正雄、あの頃「二階堂放話」より